

**注意！**

■この記事は発行年月日時点の内容のまま公開していますので、ご覧になった時点の法規制(農薬使用基準等)等に適合しなくなった内容を含む可能性がありますから、利用にあたってはご注意ください。

# 農作物技術情報 第3号 水稻

発行日 平成26年 5月29日  
発行 岩手県、岩手県農作物気象災害防止対策本部  
編集 中央農業改良普及センター 県域普及グループ (電話 0197-68-4436)

携帯電話用 QR コード



「いわてアグリベンチャーネット」からご覧になれます  
パソコンからは「<http://i-agri.net>」 携帯電話からは「<http://i-agri.net/agri/i/>」

- ◆ 分けつ発生を促進させるため、天候に応じてこまめに水管理をしましょう。
- ◆ 目標とする茎数が確保されたら、すみやかに中干しを行いましょう。
- ◆ 除草剤は雑草の種類や発生時期に応じて選択し、適期に散布しましょう。
- ◆ 取置苗はいもち病にかかりやすいので、土中に埋没させる等直ちに処分しましょう。
- ◆ カメムシ密度を低減させるため、ふ化盛期に合わせて地域一斉に草刈りを行いましょう。

## 1 生育概況

県全体の田植え盛期(50%終了)は5月17日と平年並みです。田植え終期は5月23日頃と見込まれ、概ね適期内に田植え作業が終わる見込みです。

5月初旬に移植した圃場や移植直後の風で植え傷みが見られる圃場も一部にありましたが、気温・日照時間も概ね良好に経過したことから、全般には活着は概ね良好です。

表1 県内農業地帯別田植状況(各農業改良普及センター調べ) 5/27現在

地帯名	田植え時期(月/日)								
	本年(月/日)			平年			平年差(日)		
	始期	盛期	終期	始期	盛期	終期	始期	盛期	終期
北上川上流	(5/17)	(5/21)	(5/26)	5/16	5/20	5/25	(+1)	(+1)	(+1)
北上川下流	(5/10)	(5/15)	(5/22)	5/11	5/15	5/21	(-1)	(±0)	(+1)
東部	5/12	5/17	(5/24)	5/11	5/16	5/21	+1	+1	(+3)
北部	5/19	5/24	(5/28)	5/19	5/23	5/27	±0	+1	(+1)
県全体	(5/12)	(5/17)	(5/23)	5/12	5/17	5/22	(±0)	(±0)	(+1)

注) 1, 平年値は10か年(平成16~25年)の平均値, 始期: 10%終了、盛期: 50%終了、終期: 90%終了  
2, 括弧内の数値は未確定市町村があるため推定値。

## 2 水管理(分けつの促進と中干しの実施)

### (1) 分けつの促進

好天時は浅水とし、水田水温や地温を高めて分けつ発生を促します。

最高気温が概ね15℃以下の低温時には、葉先が出る程度の深水とします。特に、県北部など田植えから間もないところでは、活着・初期生育を促すようきめ細かな水管理をしてください。

冷水のかかる水田では、ポリチューブなどを利用して積極的に水温の上昇をはかりましょう。

生わらを施用した水田では、気温の上昇とともにわらが分解して酸素不足になります。水持ちが良い水田では一時落水し、新しい水と入れ換えてください。ガス抜きと雑草防除をかねた中耕も効果的です。

### (2) 中干しの実施

目標とする茎数(目標とする穂数とほぼ同数)が確保されたら中干しを行いましょう。中干しは、土壌の還元化を和らげ、根の伸長促進と健全化をはかり、無効分けつの発生を抑制します。

県内の主要うるち品種(ひとめぼれ、あきたこまち、いわてっこ等)の目標茎数は、6月下旬に400~500本/m<sup>2</sup>程度(株あたり茎数20~30本程度)を目安とします。

ア 中干し期間はおよそ7～10日程度とし、田面に小さな亀裂が生じ、田面を軽く踏んで足跡がつく程度を目安とします。

イ 灌水や排水を容易に行うため、中干しの実施とあわせて作溝すると効果的です。

ウ 中干し後、一度に深水にすると酸素欠乏で根に障害が出ることがあるので、中干し直後は間断かんがいとし、その後常時湛水とします。以後は低温でない限り、幼穂形成期までは間断かんがいとします。

### 3 効果的な除草剤の使用

ノビエやホタルイなどの水田雑草は概ね平年並みに発生が始まっています。

これから除草剤を散布するところでは以下の点に留意して除草剤の効果を十分に発揮させましょう。

- (1) 雑草の種類や葉齢を良く確認して適期に除草剤を処理しましょう。
- (2) 十分な湛水深を確保してから除草剤を処理し、処理後3～4日間は水を動かさない（止水期間は7日間）。この間、田面を露出させないことが大切です。



写真1 2葉期のノビエ



写真2 2葉期のホタルイ

※ほとんどの初・中期一発処理剤は、この頃までに処理すれば十分効果が期待できます。

### 4 病害虫防除対策

#### (1) 葉いもち（補植用取置苗の早期処分）

水田内や畦畔際に放置された取置苗は、いもち病の伝染源になるので、まだ放置している場合は直ちに土中に埋没させましょう。裏返したり畦畔に上げただけでは降雨等で苗が枯れず、発病することがあります。

処分する際はいもち病が発生していないかよく観察し、発生が見られたら今後の本田でのいもち病発生に注意してください。



写真3 圃場に放置された取置苗

葉いもち予防水面施用粒剤の施用時期は6月20日～25日が適期です（移植時にいもち病予防箱粒剤を施用した場合は必要ありません）。例年、葉いもちが早期に発生する地域ではこれより7日程度早めに施用しましょう。

ストロビルリン系薬剤（嵐剤、オリブライト剤、アミスターエイト）は耐性菌の発生リスクが高く、既に他県（山口県、島根県、愛媛県、福岡県、大分県）では耐性菌の発生が確認されています。

嵐剤を箱施用した場合は、オリブライト剤・アミスターエイトを本田で使用しないでください。もし防除効果の低下が疑われる場合には、病虫害防除所または農業改良普及センターまで連絡してください。

葉いもち予防水面施用粒剤を施用する前や箱施用剤を使用した場合でも、圃場をよく観察して発生が見られた場合には直ちに茎葉散布してください。

## （２）斑点米カメムシ対策（発生源対策）

斑点米発生の原因となるアカスジカスミカメは、イタリアンライグラス等のイネ科牧草や雑草の穂などで繁殖します。

アカスジカスミカメは卵で越冬しますが、越冬卵のふ化（卵がかえること）盛期の前後5日間に畦畔等の草刈りを行うと、越冬世代幼虫の密度低減に効果的です（県農業研究センター平成19年度研究成果）。

アカスジカスミカメ越冬世代幼虫のふ化盛期は平年に比べ早い予測です。ふ化盛期を目安に地域全体で草刈りを行い、アカスジカスミカメの密度低減に努めましょう。

（県内各地のアカスジカスミカメ越冬世代幼虫のふ化盛期は、病虫害防除所発行の病虫害防除速報No.3 水稲編-1（平成26年5月16日発行）を参考にしてください（<http://i-agri.net/agri/>）。

なお、県北部等は今後発行される予定の情報（5月下旬，発生予報第3号）で最新の予測情報を参考にしてください）。



写真4 畦畔に群生するイタリアンライグラス

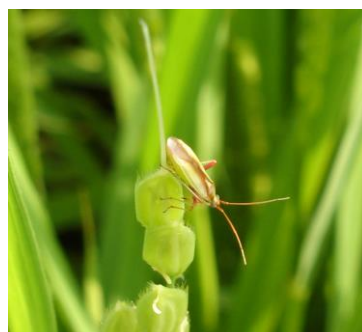


写真5 アカスジカスミカメ成虫

**春の農作業安全月間実施中！** [ 4月15日 ]  
[ ~6月15日 ]

豊作を 無事故で迎える いわたの農業

次号は6月26日（木）発行の予定です。気象や作物の生育状況により号外を発行することがあります。発行時点での最新情報に基づき作成しております。発行日を確認のうえ、必ず最新情報をご利用下さい。